

公立高の魅力どうアピールしているか(下)

—福岡県立城南高等学校に聞く—

村田純一・時事通信解説委員・時事総合研究所研究員

少子化が進む中、私立高校の授業料無償化の拡大により、公立高校の危機感が強まっている。福岡県立城南高等学校は今、受験生である中学生や保護者に学校の魅力をどうアピールしているか。校長や複数の教員から現場の声を聞いた。

25年度から定期考査廃止

—城南高の特色や魅力はどんなところですか。



(写真1)山下主幹教諭(教育推進部長)

山下岩男主幹教諭(教育推進部長)(写真1)

2025(令和7)年度から、学力の評価の仕方、成績の付け方を根本的に見直しました。いわゆる定期考査(中間考査、期末考査)をして成績を付けていく形から、各教科の単元ごとの評価を充実させるために定期考査は廃止しました。生徒たちは定期考査の前に一生懸命勉強するけど、その後で失われる学習内容が多かったからです。

24年度まで定期考査の点数を中心に評価していました。それをなくして、例えば、私は化学を教えています。化学のある特定分野で基礎となる知識や技能が身に付いているか、テストするという形にしました。

—これは城南高独自の取り組みですか。

山下主幹教諭 全国では見られますが、本校は25年度から大きくかじを切りました。24年度までは部分的にやっていて、定期考査と観点別評価の組み合わせで成績を付けていましたが、うまく評価の実態がかみ合っていないかという課題もありました。だから定期考査だけで評価するのではなく、単元、分野ごとに見て、取りまとめ、年間の評価や成績につなげるという形に再整備しま

した。

井上英一郎校長 文部科学省は評価の3観点として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」(主体的に学習に取り組む態度)だと以前から言っています。定期考査だと、どうしても「知識・技能」に重点が高くなってしまいます。

山下主幹教諭 単に化学が苦手ということではなく、化学のこの分野がうまくできていないという「振り返り」がしやすくなります。生徒が自分で判断できるという利点があります。それをベースにした上で、思考力等を問う場合は、パフォーマンス課題や思考力テストの中で思考力に特化した形に切り替え、しっかり育てるという形に変えています。

例えば、理科・化学だったら、実験の手順を自分たちで組み立て、実際にやってみて、何がうまくいったか、いかなかったかを見る。実験する時は、教師がフレームをつくって、この通りにやりなさいというのが一般的ですが、その知識はしっかり頭に入れた上で、じゃ、こういう目的のために実験するとしたら、どういう手順を組むか自分たちで考えなさいと指示します。

国語だったら、よく共通の題材で「ミロのヴィーナス」の両腕の復元の話が出てきますが、歴史的な背景を踏まえた上で、何を考え、どのように復元するのがいいか、イラストに説明文をつけさせ、知識をベースに表現する力を問うわけです。

井上校長 実は大学入学共通テスト、国公立大学

の2次試験、私大もかなり問題は厳しくて、記述では結構考えないといけない。知識・技能だけでは対応できません。

——丸暗記だけでは駄目だということですか。

山下主幹教諭 対外的には定期考査をなくしたことが大きく取り上げられますが、思考力・判断力・表現力を身に付けるためには、評価の仕方、成績の付け方を変えないといけません。今からしっかり続けていくと、その評価を通じて、学習の振り返り、授業の研究など、われわれも今までにないアプローチになっていくので、(教師と生徒の)相互作用で、とてもいいのではないかと思えます。これが一つの特徴です。

45分授業

山下主幹教諭 また、25年度からすべての授業時間を45分に変えました。24年度まで1こま50分、50分×7時間、週に1回は6時間でした。それを45分にしました。放課後の時間にゆとりを持たせて、そのゆとりの中で、生徒が計画的・主体的に学習してほしいと思います。合間の休憩時間は従来通り10分、昼休みは45分です。

——広報活動については。

和崎竜延教諭(広報課長〈写真2〉) まず学校のことを知ってもらうことが大事なので、公式インスタグラムはほぼ毎日更新しています。広報課とDX(デジタルトランスフォーメーション)推進課という教員の組織があり、協力して生徒の活動、学校の様子などを発信しています。

実際に学校に来ていただくことや、城南生に接していただくことが大事だとも考えていますので、中学生の体験入学、体験授業、中学校への出前授業、小学校での科学実験教室など高校生と交流する機会をつくっています。

福岡地区の「第6学区」の中学3年生は約8000人いて、例年12000人の中学生と保護者8000人が城南高の体験入学に来ます。また、主に小学4、5、6年生と保護者を対象に、第6学区の近隣県立高4校と城南高の5校で合同説明会も開き、それぞれ学校の特色をアピールしています。

井上校長 実際に会って話を聞く機会というのは、今まで以上に重視されていくのではないかと思えます。特に体験入学に来た中学生の保護者の方か



〈写真2〉和崎教諭(広報課長)

らは「全然、印象が変わりました」などと言われます。

探究活動の充実

——城南高の特色として、16年度から実施している「探究活動」があります。

山下主幹教諭 文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール(SSHS)」に指定されたこともあり、課題研究、生徒が興味を持ったことを自分で掘り下げて研究していくことに力を入れていきます。

(注：SSHとは、将来の科学技術人材を育成するため、先進的な理数系教育、科学的な探究活動を重点的に行う高校)

ボードに資料を張って、プレゼンテーションする取り組みをずっと重ね、文系・理系の概念を超えて探究する取り組みは本校の大きな特色です。

1年生の時から研究を積み上げ、2年生の12月に中間発表、3年生の6月に最終発表会。最後は論文を書いて終わります。本当に興味・関心があるところをそれぞれ花開かせて、チームを組んでやっています。発表は公開しているので、県内外から高校の教員や大学教授らも見に来ます。

井上校長 関東の高校はこの「探究」の時間を週2時間確保している学校もあると聞いています。

山下主幹教諭 テーマは生徒がゼロから決めます。教師と一緒に面白がり、なぜそう考えるのかと問い掛けをするだけです。生徒がゼロから考え、いろんなつまずきも経験し、問いを立てることを身

に付けなければなりません。最終的には、自分たちでやっている研究なので、原稿なしで、とうとうと語れるようになります。そういう力を身に付けてほしい。大学入試もいろんな形の試験がありますから。

(注・城南高資料によると、探究活動を通じて生徒に身に付けさせる10の力とは、次の通り。①情報収集・分析力②表現力③協働力④課題発見力⑤教科活用力⑥思考力⑦能動的学びの姿勢⑧自己の進路意識⑨社会貢献心⑩国際性)

「知識の身体化」図る

進路指導担当の**椎葉治香主幹教諭(企画推進部)**

長(写真3)には、進路指導方針を聞いた。

椎葉主幹教諭 学校の進路指導方針としては、



(写真3)椎葉主幹教諭(企画推進部長)

「第一志望の貫徹」ということを何年も続けてやってきています。最後まで貫かせるため、まずそのスタートとして、最後まで貫きたい第一志望に出合うということに大事にしたい、と思います。周りが九州大に行きたいから九州大ということではなく、自分がそこを目指す理由などを自覚的に生徒たちが考えるようにさせたいということを意識して、生徒たちに話すようにしています。(注・城南高から九大への合格実績は25年度48人。24年度を5人上回った)

——生徒の自主性を尊重し、自分でやりたいことを決めなさいと。

椎葉主幹教諭 そうですね。

井上校長 その一つの手だてがドリカムプランや探究活動です。中学生が選ぶ高校の大きな基準は「進学実績」です。それは否定できない事実ですが、しかし、われわれとしては、高校の教育を充実させたいという思いがあります。

山下主幹教諭 高校での授業や学校行事等を通じて総合的な人間力をしっかりと育て、卒業時点で十分に進学に達する学力を身に付けてもらう、この2本柱かなと思います。

——今の高校教育の在り方はどうあるべきだと考えますか。卒業する城南高生たちにはどんなことを期待しますか。

井上校長 一つは、単に暗記するのではなく身体で覚える、いわゆる「知識の身体化」を意識した教育活動が改めて重要になるのではないかと思っています。

というのも、教育現場においてもAI(人工知能)、特に生成AIの利活用が進み、AIをパートナーとして生徒の学習活動や教員の業務を行うことがますます多くなると予想するからです。

私たちは、ある文章を読んだり、人の話を聞いたときに、その内容が、自分が言いたいことと同じだと感じる場合や代弁してくれたと感じる場合、その内容をあたかも自分が考えたオリジナルの内容だと錯覚することがあります。

AIについても同様のことが言えるのではないかと思います。AIが思考した内容を自分が思考した内容だと錯覚してしまうことがあるのかもしれないということですね。「AIの思考」と「人間の思考」は本質的に違います。「AI的な思考」をしてしまう、すなわち言葉が実際の意味や現実世界とつながっていない状態で思考してしまうことを懸念します。

城南高校は25年度から定期考査を廃止して評価の仕組みを変えました。知識・技能確認テストで「知識の身体化」を図り、パフォーマンス課題や思考力テストで身体化した知識同士をつなげて思考し判断する力を養うことを目指しています。生徒には、「身体化した知識」を基に、地に足の着いた学力を身に付け、学び続け、自身のあるべき姿を問いつける姿勢を持ち続け、常に自身のアップデートを忘れず、希望を持って、広く社会への貢献を志す心意気を持って、巣立ってほしいと思っています。